

院内研修への参加が積極的となるための取り組み

～研修受講を促し支援する企画の検討～

金沢大学附属病院 角鹿 睦子

【実践の概要】

当院での現任教育における研修では、対象を明確に指定している基礎研修や指導者養成研修、役割研修の他に全看護職を対象とした自己研鑽研修がある。この自己研鑽研修には研修受講対象者の指定はなく、全職員を対象としていることと、時間外に開催される場合が多いため積極的に楽しんで受講できるような仕組みが必要となった。今回は昨年度から運用している研修受講カードについて看護職員が積極的に楽しみながらの研修受講につながっているか、またカード使用に関しての看護職員への影響についての調査を計画し、カードの運用と受講行動への影響について評価を試みた。その結果、一部の研修については十分に受講行動につながっていること、運用に関してはカードへの押印規定について問題はなかったものの、研修開催が連日となった場合の速やかな返却方法の確立が求められていることが明らかとなった。

【背景】

当院の現任教育では、基礎研修や指導者養成研修、役割研修など対象が明確な研修の他に、自己研鑽を目的とした全体研修や専門領域研修を教育委員会が企画・実施している。また業務委員会による看護必要度研修や、認定・専門看護師会による事例検討会なども同時に企画されている。さらに一昨年度より、院内の全部署での看護過程を発表する臨床看護検討会を企画し、実施している。

一方、医療安全と感染予防対策に関する研修も年に2回受講することが求められ、これら全てを合せると、看護職員が参加すべき又は参加が奨励される研修が増加してきている。このような中、研修受講へのモチベーションを維持、または楽しく受講するための工夫や取り組みが必要となった。

そこで、全体研修などの自己研鑽を目的とした研修にいきいきと楽しく参加するために、昨年度より研修受講カードの運用を開始した。

研修カードとは、自己研鑽のための全体研修を受講すると、所定の印鑑を押印し参加を保証するものである。印鑑のキャラクターはカワセミをモチーフとし、研修をイメージさせる書籍や筆記用具を持ったデザインなどとした。デザインは10種類、スタンプの色は7色あって研修毎にキャラクターのデザインと色を指定しているため、受講カードのスタンプは全て同じものにはならないよう楽しめる工夫を加えている。

【実践計画】

- ・2年間の研修受講カード運用について評価を行う
- ・研修カードの運用が研修受講にどのように影響したかについて検討する
教育担当者と看護師長を対象に、聞き取り調査にて研修受講にどのように活用されたか等について情報収集する

【結果】

- ・研修受講カードの運用について
現在の運用については、研修開始後15分までに研修会場で受付した受講者が研修カードを提

出し、スタンプを押印後、翌日各部署の看護師長へまとめて返却し、各部署でその後看護職員個人に返却している。現在のこのシステムは妥当であるが、途中退場等についての対応と、居眠り等の受講姿勢については、研修内容や時期、開催間隔などとの関連が否定できず、今後の課題と考えている。さらに特に意見要望として多かったのは研修の開催間隔についてであり、看護部以外で実施されている研修についての開催間隔への調整は難しく、研修開催が連日にわたってしまう場合があること、また、研修受講カードが受講者に研修終了後すぐに戻らない場合(研修受講者にとっての勤務時間外、たとえば勤務明けや休日時に研修受講する場合)に、「カード忘れ」として受付しなければならない場合についての対応等への要望であった。

・研修受講への影響について

医療安全と感染予防対策については、年に2回以上の受講が推奨されているため、受講不足等が把握しやすくなり、受講動機に強く繋がった。そのため、研修カード運用継続への要望が多かった。

全体研修については、達成に繋がったという意見が多く、また押印が続くと、さらに継続しようという気持ちに繋がったが、明らかに受講研修数の増加に影響を与えたという実感には繋がらなかった。

【評価及び今後の課題】

研修受講カードについては、看護部内での運用のため、院内の医療安全と感染予防対策との連携について新たな方法として整える必要がある。また、研修受講の動機として、従来の「～ねばならない」という使命感に近いような仕組みではなく、内発的動機を持続するための「自律性」、「目的」、「楽しむ」、を刺激するという仕組みからみた企画としては研修カードの運用は効果があったと思われる。今後はさらに研修受講カードが速やかに看護職員に返却されるような仕組みについて工夫すること、看護師として研修参加がキャリアアップに繋がる運用づくり、また、研修のみではなく実務に必要な講習会なども押印対象企画として取り入れるなどして、より身近な研修カードとしての位置づけを明らかにして、院内認定制度内に活用する方法を検討していきたい。